



Title	再びça mouille (ça+動詞) 構文の特性について
Author(s)	春木, 仁孝
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 31-40
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/57326">https://doi.org/10.18910/57326</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 再び ç a mouille (ç a + 動詞) 構文の特性について

春木仁孝

### 1. はじめに

筆者は春木(2014a)で、ç a mouille「濡れる」のような ç a を主語とする一連の発話について、<ç a + 動詞>という構文は認知主体が事態をインタラクションを通して認知していることを表わす構文であり、その存在はフランス語が I モード的な性格を強く持つことを示しているとして、以下のように述べた<sup>1</sup>。「<ç a + 動詞>という構文カテゴリーは、一見非人称構文に近いように見えるが、非人称構文とは性格が異なり、いわば**自動詞構文**と**他動詞構文**を中和したような構文である。統語的には ç a は動詞の項と言えるが、意味的には ç a は当該の事態が起こっている認知の場に発話を結びつける働きをしており、発話行為的には、<ç a + 動詞>はそれ以上には分析できず、行為者、あるいは事態を引き起こす原因となるもの、および事態の影響を受ける経験者と分析できる参加者<sup>2</sup>をも含んだ事態そのものを I モード的に認知していることを表わす一つの構文カテゴリーを形成しているのである。」

本稿ではさらに考察を進め、<ç a + 動詞>という構文が統語的・意味的にどのような点で構文として新しいカテゴリーを創り出しているのかという点を、非人称構文とも比較しつつ明らかにする。また、この構文の発達と天候表現の非人称構文との関係について、春木(2014a, b)で述べたことを一部、発展的に修正する<sup>3</sup>。

### 2. 参加者の記号化と ç a mouille 構文

認知言語学では事態の参加者やセッティングを焦点化の度合いによって、トラジェクターとランドマークに分ける。英語のような典型的な対格型言語では、他動詞構文ではトラジェクターが主語に、ランドマークが目的語として概念化される場合が原則的である。参加者の中で最も焦点化を受けることが多いのは、意味役割としては行為者であり、ここから主語の性格付けの中心に「行為を行なうもの」という特徴が挙げられることが多かったことが理解される。行為者(動作主)というのはまずはエネルギーをもって他の対象に働きかけるものである。しかし意志を持って何らかの動きをしていても、他の対象に対する働きかけがない場合は、たとえば「歩く、歌う」などのように自動詞の主語として概念化される。さらには経験者が主語になったり、あるいは事態が起こっている場(セッティング)が焦点化を受ければ、(1)のように事態の起こっている時空間がいわゆるセッティング主語として概念化される。

#### (1) The garden is buzzing with bees.

<sup>1</sup> I モードと D モードによる認知モード、および認知モードとフランス語の関係については春木(2012)を参照のこと。

<sup>2</sup> さらに補足するならば、事態の行為者(動作主)も、いってみればその事態が起こっている場あるいは経験者として認知されているのである。

<sup>3</sup> ç a mouille 構文の記述・説明は必要最小限に留めるが、春木(2014a, b)と一部重なる点があることを予め断っておく。

この場合、事態の場の中に「ブンブンという音を立てる」という意味でエネルギーを発している蜂の群れがいるが、そのエネルギーの他者への伝達はない。エネルギーの他者への伝達がなくとも、蜂が焦点化されていれば主語として記号化される。しかし(1)では事態の場である庭がトラジェクターとして焦点化を受けており、焦点化に関して下位に置かれている蜂の群れは、統語的にも主要な項ではなく前置詞句で表わされている。ここで問題にしたいのは、時空間のようなセッティングが主語になっている発話においては、その時空間は、(1)であれば蜂がうなっているという当該の事態が起こっているからこそ焦点化を受けているという点である。つまりそのような時空間は事態を包含しており、事態と一体化しているのである。とはいえ、(1)のような場合であれば庭であれ蜂であれ、事態を構成する参与者やセッティングをトラジェクターやランドマークとして取り出し、何らかの形で文の要素として記号化できる。しかし、中にはトラジェクターとなる参与者を記号化できない場合もある。その代表的な場合が天候表現である。*It rains. It snows.* というような非人称構文は、統語的にはダミー主語である *it* と天候動詞だけで成立している。つまりこのような発話においては、トラジェクターは存在しないと言える。あるいは概念レベルで言えば、動詞がトラジェクター（になる可能性のある対象）を包含しているとも考えることもできる。天候表現の非人称主語 *it* に対しては、Chafe, Bolinger, Langacker などが事態の起こっている状況(場)を指しているというような分析を行っているが、既に春木(2014a, b)で簡単に触れたようにそのような考え方には賛成できない<sup>4</sup>。非人称構文が存在しない日本語では、天候表現においても何らかの名詞をガ格で表現するのが一般的であり、「雨が降る」「雪が降る」のように、雨や雪をガ格において発話を構成する。しかし、この場合のガ格名詞は情報構造的にも述語と切り離すことはできず<sup>5</sup>、十全な項と言えるのかどうか疑問であり、トラジェクターと分析するのは不適切であるように思われる。日本語にも少数であるが、「吹雪く」「しばれる／凍てつく」「あもる／あまる(天降る)」のようにガ格を必要としないいわばトラジェクター的なものを包含した動詞も存在する。これらの動詞でも「雪が」「外が」「雷が」のようにガ格名詞を伴った発話も可能ではあるが、その場合でもこれらの動詞においてはガ格は必須項ではない<sup>6</sup>。

英語などの対格型言語においては本来的に非人称構文が存在するため、事態の参与者やセッティングの中からトラジェクター的な要素を取り出すことなく、事態全体をまとめて表現する典型的な場合として天候表現に考えがいく。しかし、Iモード的な性格が強い言語においては、天候表現に限らず事態全体をいわば未分化なままで、インタラクションを通して表現することは多い。フランス語の話し言葉に多く見られる、*ça* を主語とする一連の発話はまさにそのような要求を満たすために発達してきたのである。

<sup>4</sup> 詳しく見れば3人の主張には違いもあるが、*it* が指示的であると分析する点では共通している。

<sup>5</sup> いわゆる単一判断 *jegement thétique* を表わす発話である。

<sup>6</sup> ちなみに(1)のような発話でも英語がセッティング主語として表現している「庭」を、日本語では「庭が蜂でうるさい」のようにガ格で表現することも可能であり、これらの構文におけるガ格名詞句の性格を考える必要がある。

### 3. *ça mouille* 構文と天候を表わす非人称構文

確かに *Cadiot* や *Ruwet* も言うように、天候現象においては事態そのものと事態を構成する要素とを分けることが難しい。雨が目に見えるのは降雨という現象が起こっているからであり、降雨イコール雨（の存在）ということになる。つまり、このような発話においては事態は本来的に事態として焦点化されており、事態の中からトラジェクターとなる要素を取り出すことが難しい<sup>7</sup>。従って、主語代名詞が義務的かそうでないかに関わらず主語という文法的なスロットを持つ言語においては非人称構文というものが作り出されてきたのである。この種の発話が時空を始めとする副詞句を取る場合には、(2)の場合であれば降雨(*il pleut*)という現象全体がトラジェクターで、頻度または量を表わす *beaucoup*、そして場所を表わす *au Japon* が（階層的に）ランドマークの役割を果たしているという分析はできるだろうが、降雨という現象がひとまとまりに把握されていることには変わらない。

#### (2) *Il pleut beaucoup au Japon.* 「日本では雨がよく／たくさん降る」

*ça pleut* のような I モードを表わす発話は、天候表現の多くの場合が本来的に非人称構文であることで、非人称主語である代名詞 *il* に替えて話し言葉的ヴァリエントとして *ça* が用いられているように捉えられがちである。しかし、春木(2014a, b)でも少し触れたように必ずしも天候動詞による *ça* を主語とする発話が、他の動詞を用いた *ça* を主語とする発話よりも容認性が高いわけではないし、テキスト上で頻度が高いとはかぎらない。

筆者はこれまでも *ça mouille* 構文が天候を表わす非人称構文から拡張発展してきたとは考えていなかったものの、*ça mouille* 構文の発達において天候を表わす非人称動詞の存在が一定の役割を果たしたのではないかと考えてきた。その際、*geler*「凍る」や *givrer*「...に霜をつける」のような人称的に自動詞あるいは他動詞としても用いられる天候に関する動詞が、一方で *pleuvoir* と同様に非人称構文でも用いられることが *ça mouille* 構文の発達において橋渡しの役割を果たしたのではないかと考えてきた。しかし、現在ではこのような考え方は根本的に修正すべきであると考えに至った。天候現象は、本来的に現象から参加者を要素として取り出しにくい事態であり、そこから英語などでは非人称構文が発達してきたと考えられる。一方、*ça mouille* 構文というのは通常なら主語や目的語という形で事態の参加者を表現するような事態を認知主体が I モード的に認知した結果、事態を参加者を含む形で表現するために発達してきた構文である。*ça pleut* や *ça neige*, *ça gèle* などの天候関係の表現も、*ça mouille* 構文の発達の中で非人称構文とは関係なく発展してきたと考えられる。*ça pleut* という表現に抵抗を持つフランス人が意外と多いのは、既存の非人称構文 *il pleut* が規範的であり、*ça pleut* が民衆的な形であるという言語位層的な意識を持ちがちだからではないかと考えられる。本来的に事態と参加者が分けにくい事態と、事態と参加

<sup>7</sup> 文脈によっては *la pluie tombe*, *de la pluie tombe* のように「雨」をトラジェクターとして主語として記号化したり、*il tombe de la pluie* のように非人称発話の意味的な主語として表わすことは可能だが、いずれも文脈的制約があるうえに、頻度からみても発話としては有標である。

者を分けることなく I モード的に捉えて表現された事態とを区別する必要がある。

フランス語では本来的な非人称構文に加えて、理論的にはすべての自動詞は十分な文脈があれば非人称構文の発話を構成することができる<sup>8</sup>。しかし、その場合も本来は主語になる要素が意味的な主語として動詞に後置される。意味上の主語となる要素は自動詞構文に比べると動作主性を失う<sup>9</sup>など背景化されていて、事態のプロセスがプロファイルを受けていると言える。しかし、そのような転化的と呼ばれる非人称構文が成立するためには、lui などの与格代名詞や y, en, alors といった副詞的要素が必要であったり、実例においてもそのような小辞を伴っていることが多い。それは、主語のない発話を発話状況に定位する必要があるからであり、上に上げたような小辞はその定位操作の痕跡と分析できる。

一方、ça mouille 構文が用いられるとき、認知主体は事態を身体的インタラクションを通して認知しているのであり、認知主体は事態のただ中にあることが表わされている。従って、ça が発話をまさに認知の場に結びつけており、春木(2014a)で述べたように ça は定位操作の痕跡であると言うこともできるが、転化的非人称構文における小辞などが表わしている定位操作とはやはり性格が違うので、その点を明らかにしておきたい。転化的非人称構文においてはプロセスがプロファイルされているとはいえ、事態はやはり D モード的に捉えられており、発話に現われた小辞が発話を発話状況に定位するという発話行為に対応している。つまり、事態に対して認知主体はあくまでも外にいて事態をメタ的に捉えている。それに対して ça mouille 構文が用いられるときは、認知主体と事態の間にはいわば距離はないのである。認知主体は事態のただ中にいて事態とインタラクションの関係を持っているのであり、その発話の受け手や聞き手もいきなり事態のただ中に置かれるのである。

#### 4. ça mouille 構文の動詞が表わすもの

天候表現以外に、事態の中からトラジェクター的な要素を取り出しにくい場合として、音に関する事態がある。Henry(1960)は、ça gargouille を例に挙げて新しい構文が創出されていることを指摘している。gargouiller という動詞は、自動詞として液体や液体の容器、あるいは身体の器官などを主語にして、「ゴボゴボ、ブクブク、グルグル」などこもった感じの音をたてることを表わす。しかし日常的には Ça gargouille. と ça mouille 構文を用いて表現することが多い。音がする場所は前置詞句で表わすこともできる。

この種の動詞は音のありように焦点を当てている。日本語なら、「ブクブクという音がする」のような表現に相当する。gargouiller という動詞は、音の源、音をたてるものというトラジェクターと、音の様態、つまりマナーを含んだ動詞と言える。音は音の源や場所と切り離せないだけでなく、多くの場合その音の様態が問題になる。Ça gargouille. という発話は音の源が明らかでなくとも、音の様態さえ分かれば事態を記号化して表現できるのである。音の源もしくは音がしている場所が明白な場合も発話者はいわばその音に包まれて

<sup>8</sup> 他動詞や前置詞を介して義務的に目的語を取る間接他動詞も、非人称受動構文という形で非人称にすることができる。

<sup>9</sup> 非人称構文の意味上の主語はジェロンディフの意味上の主語となることはできない。

おり、**Ça gargouille.**という発話で十分なのである。もちろん、音の源を主語として記号化することはできる。しかしたとえば、**Mon ventre gargouille.**「お腹がグルグルいってる」と**Ça gargouille.**では事態の認知の仕方が違うのである。**mon ventre**を主語にした発話は、事態の中から**mon ventre**「(私の) お腹」をトラジェクターとしてプロファイルしたDモード認知による表現である。**ça**と**mon ventre**は範列関係にあるように見えるがそうではない。**Ça gargouille.**はこれ以上分析できないものとして事態全体を表わしているのである。従って、構文的にはいずれの発話も自動詞のように見えるが、**Ça gargouille.**は既存の自動詞構文とは異なる別の構文である。しかしこの種の音を表す動詞には、天候動詞のように本来的な非人称構文は存在していない。にもかかわらず**ça**を主語とする発話が頻繁に見られることから、**ça mouille**構文が天候の非人称構文と特別な関係にはないことが分かる。

春木(2014a, b)でも見たように、**ça mouille**構文は聴覚だけでなく身体感覚を表わす表現で多用される。しかし嗅覚を表わす動詞は聴覚表現とは異なり、ほぼ**sentir**に限られるため、匂いの善し悪しやどのような匂いであるかといういわばマナーを動詞以外の要素を用いて表わす必要がある。それ故、他の**ça mouille**構文と違って、**sentir bon**「いい匂いがする」や**senir le moisi**「かび臭い」のような匂いの性質を表わす要素が必要になるのである。痒みや痛みを表わす場合は、場所が明白な場合を除き、**ça me démange dans le dos**「背中が痒い」や**ça me pique partout**「体中がちくちくする」のように場所を特定する表現が前置詞句や直接目的語の形で必要になるのである。動詞**piquer**, **gratter**, **démanger**などは嗅覚の**sentir**よりも分化しており、「痒み、痛み」といった身体を感じる違和感のマナーが含まれている。間接目的語や直接目的語として人称代名詞を伴うのは、フランス語が身体の部分を表わす場合に誰の身体であるかを人称代名詞で表わす特性を持つためである。

## 5. **ça mouille** 構文と感嘆性

以下は春の自然を歌ったある創作童謡の歌詞である。

(3) **Ça bourdonne, ça chantonne. La nature est faite de chansons. Ça chansonne, ça boutonne. Tout partout s'éclatent les bourgeons.**

「ブンブンと音がする。鼻歌が聞こえて来る。自然は歌で一杯だ(歌でできている)。

歌が聞こえて来る。芽が出てくる。至るところで芽がふいている。」

この歌は、自然の中で蜂などがブンブンとうなっていて、まるで鼻歌を歌うような音が聞こえてくる。まるで自然が歌でできているかのようにいろいろと歌が聞こえてくる。至るところで植物の芽がまるで爆発するように芽吹いている、といった意味である。**bourdonner**は英語の**buzz**に相当し、**chantonner**は人が鼻歌を歌うという自動詞である。しかし、ここで述べられているのは、自然がそのような音で満ちているという事態であり、**ça**は主語となるものを指しているのではなく、動詞と一体となってそのような事態を表わしている。

**chansonner** は歌で誰か（何か）を風刺するという他動詞であるが、ここでは既存の意味とは関係なく文字通り **chanson** 「歌」から臨時に作られた動詞として用いられており、至るところから歌が聞こえてくるという意味を表わす<sup>10</sup>。**boutonner** は植物などを主語に取って芽を出すという意味を表わす自動詞であるが、これも後続の歌詞から分かるように自然の至る所で花や植物が芽吹いているという事態を表わす。ここでは **ça boutonne** が花や植物が一斉に芽吹いているという複数の事態を表わしている点が重要である。この発話が事態を I モード的に表わしているというのは、認知主体が植物の芽吹き真っ直中にあるということであり、可算的な事態であれば通常は複数の事態を表わすことになる<sup>11</sup>。音に関する他の三つの動詞においても、それぞれの現象が際だっていることを表わしており、音が大きかったり、蜂のうなり声や歌が至るところで聞こえてくるという意味を表わしている。

音に関しては **ça** を主語とする構文をとる動詞が多いことは春木(2014a,b)でも指摘したが、いずれの例においても音のひどさ、激しさなど程度の高さを表わすことに主眼がある。

#### (4) **Ça gronde, ça tonne, ça rugit.**

「(風車の中では) うなるような、雷のような、とどろくような音がしている」

#### (5) **Ça crie, ça braille, ça hurle.** 「叫ぶ声や、怒鳴る声や、わめく声でやかましい」

以上のことから分かるのは、**ça mouille** 構文が表わしている事態は何らかの意味において感嘆的であることが多いという事実である<sup>12</sup>。I モード的にある事態を認知したことを伝えるというのは、事態の生起と発話化との関係がより直接的であり、事態の現場に対する発話の依存度が高いのである。事態に対して発話はいわばナマの状態にあり、認知主体の主観が強く表わされることになる。そこから、**ça mouille** 構文は感嘆的に事態を表わしたり、何らかの強意を含意することになる。たとえば Ruwet(1990)は、**ça pleut** や **ça tonne** を自身は **il pleut** や **il tonne** の強意表現として用いるという直観を述べている。天候表現であれば **ça mouille** 構文は、その天候現象の程度が強いことを表わすのである。音であれば(3)で見たように、音の程度が強かったり、そこら中である音がしていること述べることになる。

<sup>10</sup> 「歌を歌う」という意味では **chanter** という動詞が存在するが、ここでは他の三つの動詞と半諧音(assonance)を作って調子をよくするためと、名詞 **chanson** 「歌」を想起させるために、わざと **chansonner** を使っていると思われるが、**ça chansonne** と **ça** を主語にした構文で用いることにより、他動詞 **chansonner** とは違う意味で認識されやすくなっていると考えられる。これも **ça** を主語にした発話が既存の構文とは異なることの傍証となる現象である。

<sup>11</sup> 一回的な事態の程度の大きさや強さを述べる場合に **ça** を主語とする構文を取ることも考えられるが、そのような場合は具体的な事態を通して属性への気付きを表わし、結果的に属性付与的になっていると考えることもできる。

<sup>12</sup> 天候動詞に限られるが、**ça mouille** 構文が感嘆的で強意を含むことは、既に Hilty(1959)や Ruwet(1990)も述べている。Corblin(1994)も参照。**ça mouille** 構文が感嘆的であることは、実際には **Ah, ça pleut !** の様に間投詞を伴ったり、**ça** にアクセントが置かれることから分かる。また、たとえばニュースその他で同じことを表わすときに、見出しでは注意を引くために **ça mouille** 構文が用いられ、本文では人称構文が用いられることが多いことなどからも分かる。春木(2014a)でも質問サイトの例を出したが、ネットで天気を伝えるニュースの例を補足しておく。見出しでは **Météo en Bretagne : ça se calme !** 「ブルターニュの天気：悪天候はおさまってきた！」と述べた後の本文では **Bonne nouvelle ! Le temps se calme mais restez prudents, c'est la grande marée.** 「良い知らせだ。天気は収まってきたが大潮なのでまだ注意してください。」となって、**ça se calme !** と **le temps se calme** が使い分けられている。ついでながら、**Ça tombe bien !** は「ちょうどいいところに来た、タイミングがいい」などの意味で用いられ、やはり **ça mouille** 構文と考えられるが、**Comme ça tombe !** と副詞なしで感嘆文で用いると、「なんてひどく降るんだ」と雨についての **ça mouille** 構文になる。

同じく(3)の *ça boutonne* は、「芽吹く」という事態の複数性と同時に、その後の *s'éclater* 「爆発する」という動詞からも分かるように、事態の勢い（速度）も表現しているのである。事態の複数性というのは、本来は人を主語にする動詞が *ça mouille* 構文で用いられた時に顕著に現われる。学生が一人や二人欠伸をしたぐらいの状況では教師も(6)のように言わないだろう。(7)も実際に映画の中で殺人や暴行が複数回起こっていると解釈できる。このような程度の高さや複数性という点は転化的非人称構文と比べて最も異なる点である。

(6) *Mais, qu'est-ce que vous avez ce matin ? Ça baille, ça dort...*

「みんな今朝はどうしたんだい、あくびをしたり、居眠りしたり...」

(7) *Danc ce film, ça tue, ça viole, pire encore. (Corblin, 1987)*

「この映画では、殺人やら、暴行やら、もっとひどいことも起こる」

転化的非人称構文も新しい情報を談話に導入するという点においては多少とも注意を引く発話ではあるが、必ずしも感嘆的ではなく、むしろ客観的で描写的であり、比較的長い発話も多い。たとえば(8)の転化的非人称構文では、遠くで教会の鐘が鳴っている情景がまるで一幅の絵画のように目に浮かぶ。*ça mouille* 構文の直接性との相違は明らかである。

(8) *Il chante, au loin du bois, un carillon d'été. (Hériaux 1980)*

「森の遠くで夏の鐘が鳴っている」

*ça mouille* 構文は副詞句を伴う場合も多いが、比較的短い発話が多く、それも *ça* と動詞だけという発話が非常に多い点が特徴的である。

転化的非人称構文が多いのは、「する型言語」である英語などに比べてフランス語がより「なる型」言語的であることを表わしている。「なる型言語」は I モード認知と密接な関係にあるが、しかし非人称構文そのものは必ずしも I モード的な特徴とはならないのである。

## 6. *ça mouille* 構文、他動詞構文、自動詞構文

*ça mouille* 構文の発達が天候動詞の非人称構文とは関係がないことは、*ça mouille* 構文として頻度が高い表現の中には、元来が他動詞であるものも多いことから分かる。たとえば、*éclabousser* は本来的には(9)のように車や人を主語に取る他動詞である。しかし、*ça* を主語とする(10)では目的語は取れない。主語である *ça* は、水や泥を跳ねる原因となるものを指示しているわけではない。この発話は、水や泥が跳ねてそこにいる人が濡れたり汚れたりする恐れがある事態が起こる（起こっている）ことに注意を向けているのである。

(9) *La voiture a éclaboussé les piétons en passant dans une flaque d'eau.*

「車が水たまりを通るときに歩行者に水（泥）をはねかけた」



(10) Attention, ça éclabousse ! 「気をつけて、(泥/水が) 跳ねるよ」

(10)のような構文は、TLF<sup>13</sup>の *éclabousser* の項目には記載されていない。しかし日常的に頻度は高い。本稿のタイトルに用いた動詞 *mouiller* も、人や原因となるものが人などを目的語に取って「濡らす」という事態を起こすという意味の他動詞である<sup>14</sup>。しかし、*ça mouille* という形で、雨や水などで認知主体あるいは認知領域内の何かが濡れる状況を表わす際によく用いられて、「濡れる！」という意味を表わす。やはり TLF に記載はない<sup>15</sup>。

*craindre* という動詞は他動詞として「人が何かを恐れる、嫌う」、「物が何かを苦手とする (例：この商品は湿気を嫌う)」という意味で用いられる。TLF には記載がないが<sup>16</sup>、やはり日常的には *Ça craint !* という目的語のない表現がよく用いられ、(11)のように「やばい、心配だ、ちょっとあぶない、不愉快だ、ぱっとしない」といったニュアンスで用いられる<sup>17</sup>。

(11) Dans ce quartier de la ville, après 22H, ça craint.

「この界限じゃ夜の 10 時以降はちょっとあぶない」

このような場合の *ça* は、英語の *things* のように状況を表わすようにも一見思えるが、他動詞としての *craindre* はあくまでも恐れを感じる人 (経験主) を主語に取る動詞である。つまりこの場合も *ça craint* は、既存の他動詞でも自動詞でもない、新たな構文である。

熟語的な例としてあげられることが多いが、ひどく寒いことを表わす表現として *ça caille (dur)* がある。*cailler* は「牛乳や血液を凝固させる／が凝固する」ことを表わし、他動詞用法と自動詞用法とがある。凝固から凍るなどのイメージを経て、ものが凍るような寒さを表わすようになったと考えられる。いずれにしろ、人などが何かを凝固させる、あるいは何かが凝固するというのが本来の構文であるが、寒さを表わす *ça caille* は何か具体的な物をイメージして用いられているわけではない。この動詞にはたとえば、*La nuit, on caille ici !* 「夜はここは凍てつく」のように *on* を主語にした発話もあるが、これは自動詞用法の意味の拡張 (「何かが凝固する」→「人が凍る (ほど寒い) 」) として理解することができる。TLF は自動詞の同じ項目に *on caille* の例と *ça caille* を挙げている。しかし *ça caille* を自

<sup>13</sup> TLF=Le Trésor de la langue française. (Web 上で TLFi(nformatisé)として公開されている。)

<sup>14</sup> *mouiller* には自動詞用法もあるがかなり特殊な意味なのでここでは無視する。なお *mouiller* には非人称構文はない。

<sup>15</sup> 春木(2014a)でも触れたが、TLF には方言的な非人称構文として *il mouille* 「雨が降る」が挙げられている。それに続いて行替えをしてダッシュの後に春木(2014a)に引用した歌の歌詞 (*Il pleut, il mouille/ça mouille. C'est la fête à la grenouille...*) が *il mouille* の形で挙げられている。実際には *ça mouille* の形で歌われることが多いが、*il mouille* という形であっても、ここでの意味は *ça mouille* と同様に「濡れる」である。いずれにしろ、TLF が *il mouille* の形でこの伝承童謡の歌詞を挙げている点に、既存の構文に収まりきれない *ça mouille* 構文の説明を避けるという意図があるのではないかとするのは考え過ぎだろうか。

<sup>16</sup> 小学館ロベール仏和大辞典には自動詞の項に *ça craint* だけが挙げられている。また *Le Petit Robert* には非人称の項目があり、*ça craint* が挙げられているが、自動詞とするのも非人称とするのも不適切である。

<sup>17</sup> ほぼ同じ意味で *ça craint du boudin* という固定化した目的語のある表現も用いられるが、起源は不明である。*boudin* 「血詰めソーセージ」から流血などへのほのめかしも考えられるが、あくまでも雰囲気に対する表現である。さらに、この場合の *du boudin* は *ça sent le brûlé* 「焦げた匂いがする」などの表現の *le brûlé* などと同様に、十全な意味での目的語と言えるかどうか問題があり、構文的には他動詞とは関係なく、むしろ *ça craint* の変異形と考えられる。

動詞の拡張として理解するのは無理である。TLF の項目立てにも関わらずやはり *ça caille* は自動詞・他動詞のいずれにも属さない独自の構文である<sup>18</sup>。

人を主語に取る *tuer* 「殺す」のような他動詞が *ça mouille* 構文で用いられた時も目的語を取ることはできない。つまり(6)の *ça baille* 「欠伸をする」、*ça dort* 「居眠りをする」も、(7)の *ça tue* 「殺しがある」も *ça viole* 「暴行行為がある」も同じ構文の実現なのである。

## 7. まとめ : *ça mouille* 構文の特性について

*Hilty* は非人称構文 *il pleut* と異なり、*ça pleut* は *ça ne pleut pas* と否定文にできないことを指摘している。これは *ça pleut* が I モード認知による発話であることから説明できることは既に春木(2014a)で述べた。否定文にし難いことは、*ça pleut* 「雨だ！」という発話に限らず *ça mouille* 構文全般について言えることである。この構文は肯定文や疑問文に対して、エコ的に事態を否定する場合を除いて否定文で用いるのが難しい場合が多い。インタラクションを通してある事態の生起、存在を述べるのがその機能であるので、少なくとも談話の開始部分で否定の形で用いるのは不自然な場合が多い。たとえば *Ça ne glisse pas !* 「滑らないよ！」と先行発話なしで否定発話と言えるようにみえても、それは凍った道や濡れた道では「滑るのではないか／滑りやすいのではないか」、というような暗黙の前提に対しての否定発話として容認されるのである<sup>19</sup>。この否定文で用いにくいという特性は、先に見た *ça mouille* 構文が感嘆的であることが多いという特性とも密接に関係している。

*ça mouille* 構文の中には *Ça glisse !* のように属性付与的に見えるものもある。*ça glisse* についての言及は TLF にはないものの、現行の *Le Petit Robert* や *Le petit Larousse* などでは、自動詞の項目で *être glissant* 「滑りやすい」という属性描写的な説明が与えられている。しかし、実際に用いられる場合は、発話者が滑ったり滑りそうになった時や、情報として「北部では道が凍っていて滑りやすい (ので注意!）」のように用いられて、「滑りやすい」という持続的な事態 (属性) への気付きやその事態の存在に対しての注意喚起をしている。そういう意味で、単なる属性描写ではなく有標的な事態の生起を述べる発話と同様であり、感嘆的な意味や一定の強意を含意していると考えることができる。ただし事態 (属性) そのものは気付きの後も継続しているので、属性描写的側面もあると言える。

*ça mouille* 構文が感嘆的、あるいは一定の強意を含意することが多いのは確かであるが、必ずしもそのようなニュアンスが強く感じられない場合もある<sup>20</sup>。特に表現が固定化して意

<sup>18</sup> *cailler* には *on se caille* 「ひどく寒い」、また似た意味の *geler* にも *on se gèle* 「凍えるように寒い」と再帰構文が存在し、いずれも自発用法と分析できる。不特定の人を表わす *on* を主語にした構文は I モード的な構文ではあるが、事態から経験者が取り出されている点が *ça mouille* 構文よりも分析的である。また *geler* には *on se les caille* 「ひどく寒い」という指示対象が暗黙の了解を持つ代名詞による目的語 *les(les=les testicules)* を伴う再帰構文の形も存在する。

<sup>19</sup> *ça mouille* 構文の否定版とも言える否定発話の *Rien ne urge !* 「慌てる必要は無い」についても同様である。

<sup>20</sup> 新居の庭の様子を述べた例 *Les rosiers qui encadrent la porte sont déjà en fleur et, bientôt, nous aurons aussi des primeroles. Ça prend tournure.* (Victoria Hislop, *Les îles des oubliés*: 115) 「扉のまわりのバラの木はもう花が咲いています。もうすぐタチアオイも咲くでしょう。少しずつそれらしくなっています。」では感嘆性は感じられない。*prendre tournure* は目的語を伴ってはいるものの全体として一つの述語を構成しているので *ça mouille* 構文と見なせるが、それほど強意は感じられない。しかし、やはり *ça mouille* 構文を用いているということで、発話者が自分の周りで起こっている事態のある種の感慨を持って伝えようとしている点で連続的に考えることができる。

味的にも熟語的な性格を持つ表現についてそう言える。いずれにしろ注 20 に挙げたような例からも分かるように、感嘆的あるいは強意というのは、*ça mouille* 構文が I モード的に認知された事態を表現していることに由来する結果的な意味効果であるので、発話によってはその効果が弱いものもあるので、この点の記述についてはさらに検討の必要がある。

現行の辞書においては *ça mouille* 構文は記載が無いことも多く、記載があっても自動詞または非人称の項目に例が挙がっているか、方言、俗語、あるいは熟語的表現として記載されているのが現状である。今後は *ça mouille* 構文を一つの構文カテゴリーとして認めて、辞書においても適切な記載と説明をしていく必要がある。

#### 参考文献

- Bolinger, Dwight (1977), *Meaning and Form*. London : Longman.
- Cadiot, Pierre (1988), “De quoi *ça* parle ? À propos de référence de *ça*, pronom-sujet”, *Le français moderne* 56, 3/4 : 174-192.
- Chafe, Wallace L. (1970), *Meaning and the Structure of Language*. Chicago : University of Chicago Press.
- Corblin, Francis (1994) “Existe-t-il «*ça*» impersonnel en français?”, *L'Information grammaticale* 62 : 45-47.
- 春木仁孝 (2012) 「フランス語における事態の認知方策について」『言語文化研究』38 (大阪大学大学院言語文化研究科)、pp.45-65.
- 春木仁孝 (2014a) 「ÇA を主語とする発話と認知モード」『フランス語学研究』48 (日本フランス語学会)、pp.77-84.
- 春木仁孝 (2014b) 「*ça mouille* (*ça*+動詞) 構文のネットワーク」『時空と認知の言語学』III (大阪大学大学院言語文化研究科)、pp.41-50.
- Henry, Albert (1960), “Considération sur la fortune de *ça* en français”, *Études de syntaxe expressive*. pp.75-100. Bruxelles : Presses Universitaires de Bruxelles.
- Hériaux, Michel (1980), *Le verbe impersonnel en français moderne*, Lille : Presses Universitaires de Lille.
- Hilty, Gerold (1959), ““il” impersonnel, syntaxe historique et interprétation littéraire”, *Le français moderne* 27 : 241-251.
- Langacker, Ronald (2011), “On the Subject of Impersonals”, Brdar, M. et als.(eds) *Cognitive Linguistics : convergence and expansion*. Amsterdam : John Benjamins, pp.179-217.
- Ruwet, Nicolas (1990), “Des expressions météorologiques”, *Le français moderne* 62 : 443-97.
- Ruwet, Nicolas (1991), “On Weather Expressions”, *Syntax and Human Experience*, Chicago : The University of Cicago Press, pp.82-142.